

同風

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉第127号 令和8年(2026)1月25日

資料見聞

薬師三尊像

(高知市・龍乘院所蔵、当館寄託)



薬師如来を中心には、左右に日光、月光菩薩を従えた三尊形式の仏画です。

制作されたのは十六世紀の朝鮮半島です。画面の中央から下端にかけて記された銘文には、明宗20年（1565）、第十三代明宗の健康と世継ぎの誕生を祈つて、その母である文定王后が発願したことが記されています。

また、薬師如来だけでなく、觀音如

来、阿弥陀如来、そして觀音の入滅後、

五十六億七千万後に悟りを開き如來になることが約束されている弥勒をそれ

ぞれ百幅ずつ描いたこと、百幅の半分は金泥を基本として描き、半分は彩色

を基本として描いたことも記されています。計四百幅におよぶ大事業であり、朝鮮時代における特筆すべき造仏事業であるとされています。

現在、四百幅のうち確認されているのはわずか六幅だといい、本作はそのうちの一幅なのです。

所蔵先の龍乘院は、高知市比島に所

mの浸水があると予測されています。

この予測を踏まえ、先人たちが守り伝えてきた貴重な寺宝を未来へ伝えていかなければならぬという強い思いから、平成26年、当館へ未然避難を兼ねて寄託いただきました。当館では、

本展が初展示です。朝鮮美術の傑作をぜひご覧ください。

（那須）

参考文献：九州国立博物館「うるわしき祈りの美 高麗・朝鮮時代の仏教美術」
2023年

企画展 歴民コレクションをひもとく

—あつめる、つたえる—

会期：2月27日（金）～5月17日（日）

那須 望

博物館といえば、展覧会を楽しみにご来館いただく方が多いのではないかと思います。たくさんのお客様に足を運んでいただける展覧会は、博物館の活動の花形ともいえます。

しかし、博物館は、「展示」だけでなく、他にも次のような活動を行っています。
・収集＝資料を集めること
・保存＝資料を適切に守つていくこと
・調査研究＝資料について調べることこれらの活動は、言わば博物館の「裏側」であり、普段はなかなかお見せすることはありませんが、展示と同様にとても重要な活動です。

そこで本展では、特に「収集」に焦点を当て、当館のコレクションを通じて、その活動を紹介し、資料を集めいくことの意味を一緒に考えていただきたいと考えています。



坂本龍馬湿板写真

郷土文化会館」と「高知城懐徳館」という2つの県立施設から引き継いだコレクションです。

昭和44年から平成5年まで高知城内にあつた文化施設です。閉館後、内部をリニューアルして現在は県立文学館となっていますが、石張りの外観は郷土文化会館時代のままです。

坂本龍馬湿板写真

この写真は、慶応2（1866）年または翌年、長崎の上野彦馬のスタジオで撮影されました。撮影者は彦馬の母で写真技術を学んでいた井上俊三とされています。

県には昭和57（1982）年、武市祐吉氏から山内容堂、後藤象二郎の湿板写真とともに寄贈されました。武市祐吉氏の父である武市佐市

片岡家資料

郷土文化会館の活動は、あしかけ25年という短い期間でしたが、特筆すべきは、県内資料の基礎調査を行ったことです。その成果は、一部の市町村ではありますが、1市町村につき1冊ずつ、調査報告書にまとめられています。

片岡家資料は、郷土文化会館の調査をきっかけに寄贈された二千点を超える一大コレクションで、黒岩城（現佐川町）の城主だった片岡直綱を出自とする片岡助親の家系に伝わった文書類です。その内容は、日記や同家の経営に関わるもの、維新期の書状、武術関連、俳句など多岐にわたります。また時代も近世から近代に至るまであり、日本の大きな変化を一つの家を通じて紐解くことのできる貴重な資料群です。今後も幅広い調査研究に活用していくことが期待できます。

歴民館、誕生前夜

現在、当館では、約18万点の資料を所蔵しています。このうち約4万5千点は、開館時すでに収蔵していた資

郎（1872～1939）は、明治時代に高知県史の編さんに携わり、今も続く「土佐史談会」を立ち上げるなど、郷土史研究の発展に大きな貢献をした人物です。調査研究の傍らで資料の収集も行い、龍馬の写真は井上俊三から譲り受けたといいます。

これら3枚の湿板写真のフレームには「武市祐吉氏寄贈」というプレートが埋め込まれており、資料の来歴を伝えています。

■高知城懐徳館

かつて高知城の内部では、美術工芸品や歴史資料など様々な資料が展示、収蔵されていました。懐徳館から当館に移管された資料には、動物のはく製なども含まれています。本展では、備前焼の「甕棺」を展示します。

この甕棺は昭和33年（1958）、高知市桜馬場の円満寺跡から出土し、中には人骨や櫛などが入っていました。懐徳館では、高知城築城奉行の百々越前守安行の甥の妻の甕棺であると展示紹介していました。

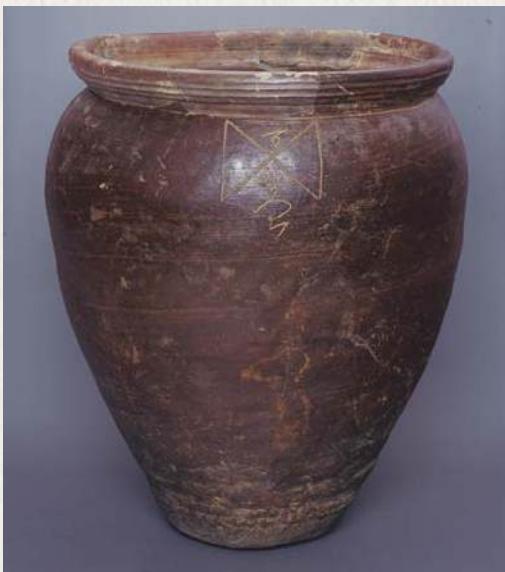
あつめる—歴民館の収集活動

当館の資料の多くは、「寄贈」「寄託」「購入」によって収集してきました。「寄贈」では資料の所有権は県となる一方、「寄託」では所有権は県に移らず、あ

くまで資料をお預かりしている状態です。所蔵資料の大部分は県民をはじめとする所有者の皆様から寄贈いただいている、寄託は全体の資料数の僅か数%に過ぎません。

また近年、資料の購入は予算的に厳しい状況が続いています。当館が高額で購入した直近の資料は、平成23年に購入した「長宗我部元親書状平出雲守宛」です。元親が伊予喜多郡平郷北山の平出雲守に宛てた書状で、田所城（現愛媛県大洲市）から退却したことをやむを得ないとし、内子の曾祢宣高と相談して、作戦を進めるよう求めていました。元親の四国攻めの一端を知ることができます。元親のできる重要な資料であり、宮城県の個人所有者から長宗我部氏の居城跡に立地する当館で活用してほしいと相談があり、購入に至った資料です。

ところで、総資料数18万点といつても、これまでの収集活動では、出会った資料すべてを集めてきたわけではありません。特に民俗分野の大型資料は、物理的に収蔵庫に入れることができない場合もあります。平成9年には、奈半利町加領郷で使われていた和船の大



甕棺

敷船を当館では収集できず、香川県の瀬戸内海歴史民俗

つたえる—収集はつづく

高知県では、人口減少が最大の課題となっています。過疎化、高齢化の進行は、人々のコミュニティや地域文化の衰退を招き、また、南海トラフ地震のような大規模災害においては、地域社会や文化が根こそぎ断絶してしまう



長宗我部元親書状 平出雲守宛 無年号7月28日付



旧大板高校のようす

恐れがあります。ハコモノである博物館では「資料収集は重要、でも収蔵庫に入らないモノは集められない」というジレンマは避けられません。そのうえで重要なのは、すべてのモノを残していくことは不可能であるという前提に立ち、モノにまつわる記憶や歴史などの情報を記録したり、生活選択の過程をつまびらかにしていくことや文化の変化をあらわすモノを収集したりといった「選択」をすること、その選択の過程をつまびらかにしていくことではないでしょうか。

そこに人々の暮らしがあった歴史、記憶を残すため、災害復興の拠り所となる地域のアイデンティティを繋いでいくため、そのために当館の収集活動はいまも、未来も続いていきます。

長宗我部元親と羽柴兄弟

青井 恵理香

令和8年1月から、NHK大河ドラマ「豊臣兄弟！」が放送開始しました。

主人公は羽柴秀長。

秀吉を支えた名参謀として名高い彼ですが、動かしてはならない神様を動かしてしまったり、町民たちに厳しく税を課したり、秀長が支配した奈良ではあまりいい話しが残ってはいないようです。死後は、大和郡山城から溜め込んだ銀がざくざく出て来たとして、かなりの吝嗇家であつたと言われています。

さて、ドラマではどのようなキャラクターとして描かれるのか、注目です。

そんな秀長ですが、彼は、長宗我部家の歴史を語るうえでは、外せない重要な人物となっています。兄・秀吉が命じた元親討伐軍の総大将を務め、元親の生き死には秀長にかかっていたからです。

元親と秀吉の対立過程はとても複雑で、阿波三好家と対立をしていた元親が、織田信長に攻め落とした三好家の所領であった阿波と讃岐の返上を求められたことから始まります。信長が本能寺の変で討たれてしまつたことで、

織田家と和解が出来なくなり、これが引きずられ、織田家を継いだ秀吉個人とは、特段大きな理由がないにも関わらず、ぎくしゃくしていました。人々、

元親は秀吉とは対立する心はなく、降伏を示し、阿波と讃岐を返上すると意思を示したうえで、自分の息子たち（嫡男・信親と三男・津野親忠）を人質として大坂に差し出していました。しかし、毛利家が伊予を欲しがり、秀吉が毛利側の意向を重視し、人質を返したことで交渉は決裂。衝突に発展しました。

秀吉は元親を討ち取ることを自分の家臣達に命じ、秀吉自ら四国へ出陣して元親の首を刎ねようと意気込んでいました。

秀長は、そんな秀吉の出馬を「外聞」のため「遠慮」するよう申し出て、秀吉を押し留めることに成功しています。

秀吉が出陣していたら、元親との和議を調えることが出来なかつた可能性を秀長は考えていたのかもしれません。（河内将芳『図説羽柴秀長』戎光祥出版、令和7年）

阿波国に上陸した秀長は、一宮城（徳島県徳島市）を元親の命令で守備して

いた江村孫左衛門尉・谷忠兵衛尉に宛てて起請文を出しています。本史料は当館へご寄託頂いており、二階長宗我部展示室にて公開中です。

内容からして、元親に宛てられたものですが、貴人に直接書状を宛てるのは不躾であるため、元親にへりくだる姿勢を見せ、あえて秀長は元親の家臣に対しても宛てたと考えられます。

その中では、元親には土佐一国を渡すように秀長から秀吉に掛け合うこと、五日間は一時休戦をすることなどを誓っています。

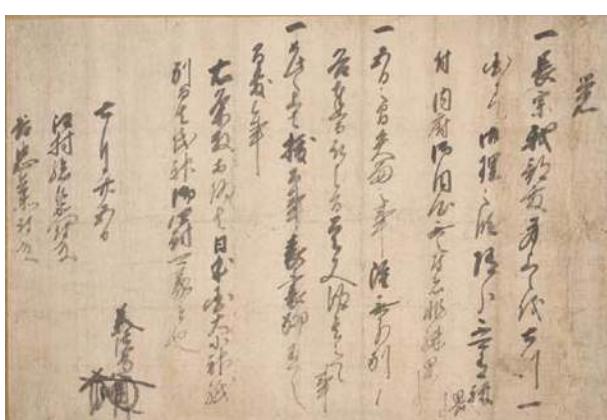
元親は降伏し、そのあと、秀長の「幕下」（家来）となり、秀長に付き添われて秀吉と面会し「熊の皮」を贈っています。（天野忠幸『大和大納言 豊臣秀長』平凡社、令和7年）

秀吉・秀長の家臣となり、羽柴姓をもらつて「羽柴土佐侍従」を名乗ることになる元親ですが、それでも、元親にとつて秀吉は、油断を許されない恐怖の対象でした。秀吉の機嫌を損ねてしまうと家が取りつぶされてしまう可能性が高かつたからです。

京都清水寺に、元親の邸に、秀吉が訪ねて來ることになつたので、秀吉の機嫌がよくありますよう祈願する文書が残されています。「元親記」や「土佐物語」によるともてなしは成功したようで、元親の決死の祈りが通じたお

かげかもしません。

令和8年中は、『長宗我部家と四国』と題し、「秋山家文書」（香川県指定、※パネル）や「金子家文書」（埼玉県指定、※パネル）などの元親の四国、そして、秀吉・秀長と元親の関係史料などを長宗我部展示室にて順次展示予定です。



江村孫左衛門尉・谷忠兵衛尉宛羽柴秀長覚書（個人蔵）

信長の城 小牧山城跡・岐阜城跡を巡つて

松田 直則

長宗我部元親の長男は、織田信長から烏帽子親として信長の「信」を与えられ「信親」を名乗っています。土佐を統一した天正3年（1575）頃には元親は信長と誼を通じており、岡豊城などの城づくりに信長の影響を受けているのかどうかを調べるため、信長が築いた小牧山城と岐阜城に曾我学芸員と出張してきました。

信長は、永禄3年（1560）に桶狭間の戦いで勝利した後、永禄6年（1563）に平地の清州城から標高85mの小牧山に城を移しました。その時に、石垣を使つた先進的な城づくりが進められました。永禄10年（1567）には、岐阜城に移りますが、天正4年（1576）に築城を始めた安土城の前身となるこの2城には、後の城づくりのベースとなるものがあります。

小牧山城は、濃尾平野の独立峰である小牧山に築城された城です。信長が美濃攻めを終えるまでの4年間しか使われなかつたようです。近年の発掘調査により、城郭を取り巻く三重の石垣（三段の石垣で一番下の段は腰巻石垣）が発見されました（写真1）。こ

れにより小牧山城は戦時に急いで造つた城ではなく、清洲城に代わる新たな軍事拠点として築かれた城郭であることが判明したようです。

小牧山城の登城口から、本丸のある頂上に向かうところには直線的な大手道が設けられていて、途中の中腹から折れのある道へと変化しています。この大手道は、後の安土城の縄張りとの類似性が指摘されています。今年行われた大手道の調査では、永禄期と考えられる両端に石垣を伴う登城路が確認され、小牧山城の登城者を圧倒させたものと思われます。また、主郭に上がる虎口（出入り口）が折れ曲り石垣で囲んだ空間もありました。その入り口には下から運んだ花崗岩の巨石が置かれています。花崗岩は、小牧山周辺には存在しないため北東約3キロ先の岩崎山から運ばれたものと考えられています。わざわざ、岩崎山から巨石を



写真1



写真2



写真3

信長は、小牧山城からさらに進化した石垣の城である「岐阜城」（写真2）を築いています。斎藤氏の居城を改修して山上城郭と山麓居館からなる城を建てる。最近では、天守の北西部で信長が築いた新たな石垣が見つかっています。岐阜城の一ノ門には、巨石石垣も据えられています（写真3）。巨石石垣は、この地域の守護である土岐氏の大桑城の岩門という場所でも見つかっています。門の前に巨石を置くことで、権威の象徴的な意味合いもあったのでしょうか。

小牧山城の虎口前の巨石、大桑城の岩門、岐阜城の一ノ門などの巨石石垣は、斎藤氏から織田信長に引き継がれた技

術だと考えられます。

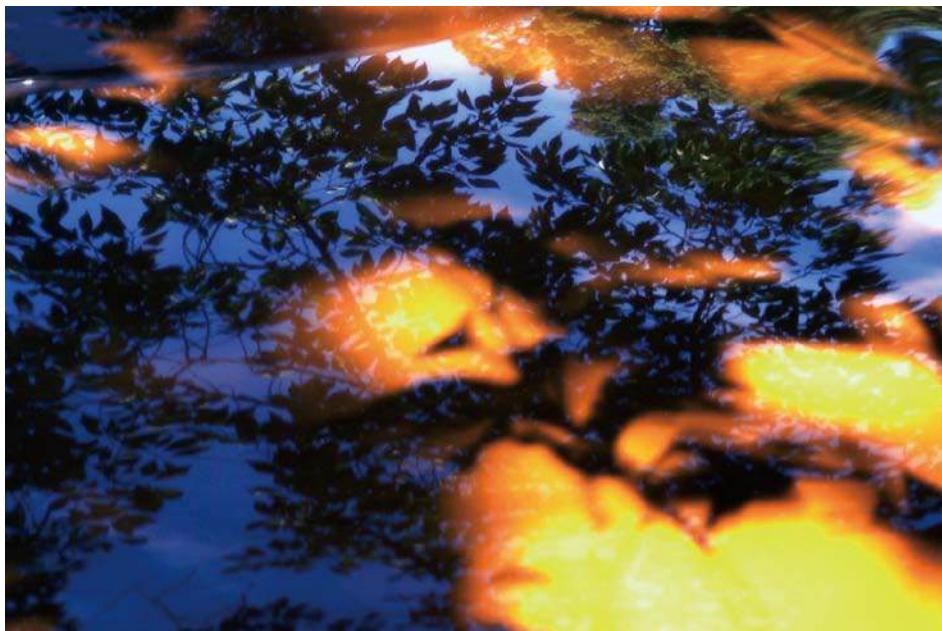
岡豊城跡の四ノ段の虎口前にも巨石があります。この巨石は、小牧山城の虎口石垣、岐阜城一ノ門や山麓居館の巨石垣と何らかの繋がりがあり技術系譜も考えられるのではないかと思います。岡豊城にこの技術が導入されたとすれば、構築方法の情報や技術者の協力が必要で、元親の妻の実家である石谷家の関わりが想像できます。元親妻の義理の兄である石谷頼辰が、城の造り方や技術援助を信長に頼んで元親に教えた可能性があるのか興味がそそられます。元親が、土佐を統一した頃は信長とも友好関係があり、石谷氏を通して信長の城づくりの情報が入つてた可能性があり、そのことは岡豊城詰の建物に葺かれていた天正3年銘の堺産の瓦片などからも伺い知ることができます。

元親が土佐統一や四国統一に向かつた城づくりについて追及し、その特徴や変遷を掴んで令和8年度に予定している城郭の魅力を発信できる企画展に活かして行きたいと思います。

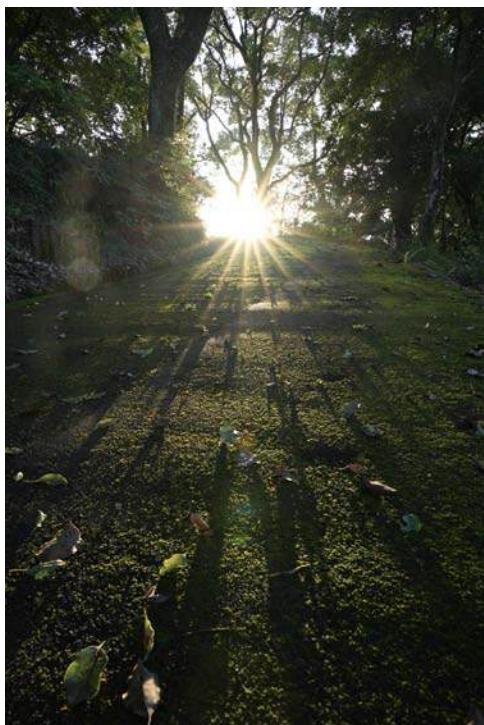
「第20回岡豊山フォトコンテスト」受賞作品決定！

長宗我部氏の居城とした岡豊城跡がある『岡豊山』。

この岡豊山の魅力を再発見していた
だくため、「岡豊山の春夏秋冬」をテー
マに募集を行いました。



最優秀賞「夕日燃ゆ」 明神玲子



優秀賞「秋陽」 伊藤博範

それぞれの視点から撮影された『岡豊山』。個性豊かな作品が集まりました。

紙面では、最優秀賞と優秀賞に輝いた作品をご紹介します！



優秀賞「国分川夕景」 太田和子



2月7日（土）から23日（月・祝）まで開催の天然写真家 前田博史写真展は、自然豊かな森がテーマ。豊かな森の表情を存分にお楽しみください。

会場…2階エントランスホール

（本写真展は無料でご観覧いただけます。）

審査総評
天然写真家 前田博史

今年はスマートフォンでの応募も多く、撮影対象も多岐にわたつていて充実した応募内容になりました。

出品された応募作品は、それぞれの個性の輝く自由な表現で、審査していくとても楽しかったです。

次回の応募も楽しみにしています。

れきみんニュース



当館ホームページ 随時更新中！

当館のホームページでは、展覧会やイベントの情報のほかにも、さまざまなコンテンツを用意しています。

「学芸員の机から」では、考古、歴史、民俗、美術工芸のそれぞれの学芸員が、日ごろの資料調査や業務の紹介をしたり、作品の深堀りをしたりと、博物館の「ウラガワ」を少しだけ紹介しています。

また「岡豊風日」は1991年発行の第1号からダウンロードいただけます。（一部欠号あり）

そのほかにも、一部の講座のアーカイブ配信や刊行物の通信販売も行っています。

ぜひ一度ご覧になってみてください。



当館HP
QRコード

花を植えました



令和7年12月2日、「土佐のまほろば地区振興協議会」の女性部と当館職員で、岡豊山の県道入口から擁壁部分に、パンジーやビオラといった花々を植えました。

寒くなる時期、岡豊山に自生する草花は冬支度でしたが、みなさんと植えた色とりどりの花がお客様を迎えるました。



「からくり人形」ただいま調査中

当館では、平成10年、同21年に「からくり人形」をテーマにした企画展を実施しています。当館の十八番ともいえるネタですが、なぜ「からくり人形」なのかご存知でしょうか？

江戸時代中期、現在の南国市に細川半蔵という郷士がいました。彼は幼いころから学問を好み、天文暦学を学びました。父から細工の技術を習い、時計やからくり人形作りに熱中したといいます。半蔵がからくりの仕組みを絵入りで解いた『機巧図彙』（寛政8年刊）は、当時のベストセラーになりました。半蔵は才能を見出されて幕府の天文方になり、寛政の改暦事業にも参画しましたが、改暦の成果を見ることなく江戸で没したと言われます。その死は謎に包まれており、死因や墓所もはっきりしていません。

半蔵は「からくり半蔵」の名で親しまれており、南国市では「からくり半蔵研究会」が長年活動を続けています。また、海洋堂スペースファクトリーなんこくの一角には、からくり人形や半蔵を紹介する展示コーナーもあります。

当館では、その半蔵作と伝わる茶運び人形一体、半蔵の著作『機巧図彙』を所蔵しています。昨年4月26日の高知新聞「わが館のイッピン④」でも紹介されたとおり、当館のお宝ともいえる資料です。

前回、平成21年のからくり展でお世話になったからくり人形師、故・半屋春光さんの弟子である半屋弘蔵さんが、栃木県にお住まいです。今回筆者はその半屋弘蔵さんを訪ね、からくり人形について教わり、調査させていただきました。遠方にお住まいのため、普段は電話でのやりとりですが、お会いしてじかに説明を聞き、復元からくり人形の動かし方を教わるなど、貴重な時間を過ごすことができました。

当館ではこれらの調査成果をふまえ、令和8年夏、企画展「からくり人形のヒミツ」（仮）を開催予定です。ご期待ください。
(亀尾)



復元茶運び人形の操作法を説明する半屋弘蔵氏

